



日刊 動労千葉

82.6.24
No. 1078

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五ノ六(公衆)四三二(22)七二〇七

革マル分子長谷川・海宝の転勤を許すな!

当高「本部」革マルのゆ着で、ギリ食の「千葉地本の救済」

今日、動労「本部」革マル、国鉄当局が一体となり、動労東京地本革マル分子・長谷川、海宝の千葉鉄局への転勤が策動されている。これは「本部」革マルが組織人員的にもシリ貧化の一途をたどり、かつ、内容的にも全く労働組合の体をなさないデッチ上げ「千葉地本」テコ入れのために、革マル分子・長谷川、海宝を送り込み、再び組織破壊II権力へのタレコミを策動せんとするものであり、断じて許すわけにはいかない。

我々は、革マル分子・長谷川、海宝を手先とした、新たな組織破壊策動を必ず粉碎しきることを明らかにするものである。

長谷川・海宝は札つきの革マル分子である

昨年以來、当局は名前を伏せたまま、東鉄からの「転勤希望者二名」の千葉局への受け入れについて執ように打診してきた。

最近になってこの「二名」が、動労東京地本茅ヶ崎支部の長谷川正彦(三五才)と、武蔵小金井支部の海宝芳洋(三三才)であることが判明した。この二名こそ青年部役員を歴任し、動労千葉組合員に対する数々の暴力的襲撃の先頭にたつてきた、誰一人知らぬ者はいない、憎むべき札つきの革マル反動分子なのである。

デッチ上げ「千葉地本」の惨状と革マルの焦り

革マル分子の意図は明白である。かつて東京地本・松崎「委員長」は、「房総の片隈にうごめいているウジ虫など小指の先でチョンダ」などと豪語した。

ところが現実はどうだ。

「本部」革マルの反労働者性を身をもって知りつくした組合員は、ありとあらゆる敵対をはねのけ、実に一三〇〇名が動労千葉に結集し、ますます意気軒こうと闘い、組織を拡大してきているのである。

「本部」派の実態は、松崎自身が「どうしようもない部分」と軽蔑した土屋粹に代表されるひとにぎりの右翼的・反動的部分を金品と酒でやつとつなぎとめて、「地本」の名前をかぶせただけにすぎず、他は嶋田誠のように学生革マルの経歴を隠して潜入した者、斎藤吉司のように東京地本から転勤してきた者、そしてこれから先東鉄への転勤希

望を出している者だけという惨状なのである。こうした実態ゆえに、当然にも職場の活動などとり交流会なるものをやって、それが組合運動かのように思い込んでいるのである。

そもそも結成後一年半にもなる「千葉地本」は、いまだ竹内・村上らの革マル分子がガド下(津田沼三信ビルをひき払い、西千葉・稲毛間の高架線の下を当局から都合してもらった事務所移転)に居座り、一切をひきまわしているのである。

土屋粹「千葉地本書記長」は、「いつでも革マルの連中にかまかせておかないで、自分達でやったらどうだ」との千葉の組合員からの忠告に対し、なんと「そんなことをいったってタマがいねえだろよ。おれらの実態を見ればわかつぱよ」といい出す始末である。

長谷川・海宝もろとも全「本部」派を千葉から一掃せよ

動労「本部」革マル・松崎にとって、弱体「千葉地本」は頭痛のタネであり、なんとかしなければと考えついたのが、実家が千葉にある革マル分子を千葉局に転勤させることだったのである。

松崎は二三年前から、長谷川と海宝を計画的に組合役職からおろしてノンポリを装わせ、当局と取り引きして転勤させ、「千葉地本」のテコ入れと新たな動労千葉破壊を策動しているのである。たとえ当局はだましても、動労千葉の組合員をだますことはできない。長谷川と海宝を知らぬ組合員など一人もいやしないのだ。

当局と癒着し、組織破壊を目的に転勤しようなどという革マル分子、長谷川・海宝に動労千葉の組織を汚されてなるものか。我々の回答は、いかなる反動的意図も断固粉碎するのみである。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ!

「空港設置」閣議決定16周年弾劾、「話し合い」攻撃
粉碎、二期阻止・空港廃港

7・4三里塚全国総決起集会

主催 三里塚第一公園 三里塚芝山連合空港反対同盟

7月4日(日)正午